

して言論の自由を行使しているだけだろう。第5章5-4で見たように彼らはかなり特異であり、コミュニケーション能力に難がある。が、彼らも社会の一員であり、平等に言論の自由を持つことには一点の疑う余地もない。それを規制によって制限するようなことがあってはならない。炎上で問題にすべき点はそこではない。

過剰な発信力

炎上で問題にすべきなのは、現状の SNS では、誰もが最強の情報発信力を持っていることである。すなわち、誰もが相手に強制的に直接対話を強いることができ、それを止めさせる方法がない。ブログにコメントを書き込めば、ブログ主とそのブログを見ている人は全員そのコメントを見なければならない。Twitter でコメントをつけると Twitter の主は必ず見なければならないし、そのコメントに返信すれば、フォロワー全員がそのコメントを見ることになる。そしてコメント者はいつまでもこれを続けることができ、止めさせる方法がない。アクセス禁止にしても他の ID を取り直せるし、炎上時にはあとあとから新手の人が現れる。有無を言わず相手に直接対話を強いて、その直接対話をいつまでも続けることができること、これはネット上では当たり前のように思えるが、一般的な情報発信のあり方としてはきわめて異例である。一個人の情報発信力が不釣り合いに大きいからである。同じようなことがネット外であったとすれば、その異例さがわかるだろう。異例さを理解するためにいくつかの思考実験を試みよう。

例えば、ある公民館でパネル討論会があったとして、聴衆からきわめて偏った知識あるいは政治信条で延々と質問する人が出たとする。会場にいる他の者は辟易として止めてほしいと思うが止めさせる方法がない。そのうち彼は激昂して罵り始めるがそれでも会場から追い出すことができない。そういう状態がずっと続いたらどうなるだろうか。あるいはテレビの討論番組の途中で、バーチャルリアリティのように視聴者の一人が現れ、出席者に食ってかかったとしよう。最初の二言、三言はよいとしていつまでも続けたらどうするか。当然スタジオから退出させようとするだろうが、その方法がない。そのような人がスタジオに2人目、3人目と現れたらどうなるだろう。本を書いて出版したら物

議をかもして抗議の手紙と電話が山のように届いたとする。通常はそれらは出版社でブロックされるが、それらが毎日自宅に届き、しかも廃棄はできず必ず手紙を読まなければならない（例えば読まなければ外出できない）としたら、また自宅にかかってくる電話にも出なければならないとしたらどうだろうか。

実際にこのようなことが起きれば、情報発信の活動自体を停止させるしかない。パネル討論会なら質問者の激昂が1時間も続けば登壇者は席を立ち、会場からは人が去り、討論会は解散することになるだろう。テレビ局なら、スタジオに2人目、3人目が現れてきた段階で、放送を中止するだろう。本の例なら、そのような対応を強いられるならば、そもそも物議をかもすような本を誰も書かなくなるだろう。すなわち情報発信を停止するしかない。ネットの炎上でブログを閉鎖し、アカウントを削除するのと同じようにである。もちろんこのような常識外れのことは実社会ではありえない。しかしそのありえないことが普通に起きているのがインターネットなのである。通常のメディアと比較すれば、インターネットでの一個人の情報発信力がいかに強力かがわかる。

経済学風の言葉を使うと、言論の自由競争市場でのフリーライド問題と負の外部効果の問題ということもできる。言論の自由は誰でも持っていて何を言うのも自由である。しかし、その人の発言を聞くかどうか人も人の自由である。相手に強制的に意見を聞かせる権利は誰にもない。したがって、通常は人に自分の意見を聞いてもらうためには、さまざまな努力をしなければならない。本を出版するにはそれなりの努力があるし、テレビに出るためには才覚・能力をまず示して採用してもらわなければならない。ブログのカウンターとTwitterのフォロワー数を増やそうとすれば、魅力的な話題をそろえ、話を面白くし、紳士的であろうとするなどの努力をしなければならない。その努力の結果としてようやく1万人といった読者がつく。いつの時代も言論の世界では読者を獲得するための自由競争が行われている。

ところが、そのブログなりTwitterで第三者がコメントをつけると、その人は誰でもこの1万の読者に自分のコメントを読ませることができる。つまり、労なくして1万人の読者を獲得すること、すなわちフリーライドすることができる。通常はこのことは暗黙には人々に理解されており、コメントをする人は1万人の読者を意識して丁寧に意見を述べ、そういう場での発言を許してくれ

たブログ主・Twitter 主に感謝し迷惑はかけまいとする。何万人もの読者がいる有名人のブログ・Twitter ならその有名人から返事が来て議論できただけで感激であり、異論を述べるとしても節度をもって表明し議論が進行する。ほとんどのケースはそれで話がすむ。

しかしながら、ごく少数ではあるが、これに当てはまらない人がいる。炎上の主役の特異な人々である。彼らは節度とは無縁であり、彼らなりの正義の旗のもとに攻撃を始める。罵倒や中傷が起り、負の外部効果が発生する。他の読者1万人は不愉快な思いをすることになるが、この特異な人々を排除することができない。アクセス禁止をしても ID を変えれば書き込んでくるし、本格的に炎上すれば次々に攻撃者が現れる。議論の場はこのごく少数の人々に事実上乘っ取られてしまい、閉鎖するしかなくなる。フリーライダーがその場を乗っ取り、負の外部効果をまきちらして、最終的にはその場を使えなくしてしまうことになる。まことに理不尽なことこのうえなく、情報発信力の濫用というほかはない。これが炎上である。

炎上を起こす人を節度がない、良識がないと非難するのは容易である。しかし、彼らはネットに備わった機能の範囲内で、言論の自由を行使しているだけであり、彼らを責めてもしかたがない。問題は、ネットでの一個人のデフォルトの情報発信力がそもそも強すぎる場所である。すなわち、強制的に議論を開始し、他の誰もが不愉快な思いをしても、それを止めることができず、議論の場を閉鎖に追い込んでしまうだけの発信力を誰もが持っているというネットの仕組みの方にある。

インターネットの学術性

いま述べたように、ネットはデフォルトで誰もが最強の情報発信力を持っている。数万人の読者がいる他人の情報発信の場にいつでも乗りこんで議論を吹っ掛けることができ、相手はこれを拒否することができない。その気になれば他者の情報発信の場をいつでも閉鎖に追いこむことができる。なぜだろうか。なぜこのような強い力が個人に与えられているのだろうか。

それはインターネットの出自に理由がある。インターネットはもともと学術用のネットワークとして始まった。当初は理系の研究者がコンピュータをつな

いで、データをやりとりすれば研究上便利だろうという趣旨でスタートしたネットワークである。しかし、始めてみると研究データのやりとりより、付随的な機能だったメールの利用が爆発的に増えた。研究者はデータそっちのけでメールを使って議論を始め、これが研究の生産性を飛躍的に高めることがわかる。かくしてメーリングリストや掲示板が作られ情報発信の場が形成されていく。ここからインターネットがスタートする。

学術的ネットワークであれば、参加者が完全平等であるのは当然のことである。研究会で議論するとき、いかに高名な先生でも駆け出しの大学院生でも同じ発言権を持っているし、持つべきである。学問的真実を議論する場で発言力に最初から差があることはありえない。また、真摯に研究に取り組む研究者なら、誰もが議論に参加できるのも当然のことであり、メンバーを制限することもありえない。かくして学術的ネットワークとしては、誰もが参加でき、最強の情報発信力を平等に持つ仕組みというのはごく自然な選択であっただろう。

すべての人に最強の発信力を与えれば濫用の恐れが出てくる。しかし、当初のインターネットは学術ネットワークだったため、濫用は抑制されていた⁴⁾。学術的ネットワークの場合、相手が研究者なので、実はおおよそのところ相手が特定化できたからである。この人は〇〇大学で××を専攻している人だということまではわかるし、所属する研究室の特定も容易である。そうなるとひどい書き込みをすれば、研究室や大学に迷惑がかかるのでこれが抑止力になる。もしひどい書き込みがあったら、直接その大学当局、あるいは研究室の指導教官に文句を言って当人に注意することもできる。要するに、初期のインターネットはメンバーが研究者だったために、一種のゆるいコミュニティを形成しており、これが抑止力の役目を果たしていた。

初期のインターネットがゆるいコミュニティを形成していたことを示す事件として、インターネットがパソコン通信とつながりときのひと悶着を紹介してお

4) ただし、学術ネットワークならではの技術を使った濫用はあり、abuseと呼ばれていた。例えば、掲示板に投稿された記事を自動的に検索し、その中にturky(トルコ)という単語があると、その掲示板と投稿者のメールアドレスに、トルコがかかわったある虐殺事件についての記事を自動的に送りつけるプログラムを回していた例などである。文脈も何もなく、記事を見させられる側はたまったものではない。このように技術者ならではの技能を使った濫用はいくつかあった。しかし、発生頻度は低く、また本書で問題とする炎上とは性質が異なる。

こう。1980年代から PC-VAN、Nifty-Serve といったパソコン通信は、インターネットとは別にパソコンメーカーによって独自に始められ、一定のユーザを獲得していた。1990年代前半に、これとインターネットをつなごうという話になったとき、インターネットの側から強硬な反対意見が出た。そのときの反対理由が「どんな奴がつないでくるかわからないじゃないか！」であったという⁵⁾。この表現は驚くべきことである。この表現は裏をかえせば当時のインターネットでは、つないで来る人がどういう人か大体わかっていた (!) ということだからである。現在のインターネットはまさに、どんな奴がやってくるかわからない世界であるが、かつてはどんな人か大体わかる状態にあったのである。このエピソードは、当時のインターネットが学術ネットワークであり、研究者間でゆるいコミュニティを形成していたことをよく示している。

当時、パソコン通信との接続に反対した人は、パソコン通信からつないでくる人が問題を起こした場合、それを抑止する方法がないことを危惧したのだろう。実際には危惧よりもつなぐことのメリットの方が大きいと判断され、接続は実施される。他にもさまざまなネットとの接続を重ねて、インターネットは巨大な社会インフラに成長した。確かにつなぐことのメリットはデメリットを上回った。しかし、学術ネットワーク以外とつなぐときに反対者が危惧した問題点は、依然として残っていたと考えるべきであろう。それが現在、炎上問題として、もう少し言えば炎上に伴う情報発信からの人々の撤退として顕在化している。

すべての人が最強の発信力を持ってそれが濫用されなかったのは、そこが学術ネットワークだったからである。ちょうど、剣と楯という武器を手にしても、それが騎士道精神あふれる騎士たちならば力の濫用が起きないのと同じである。しかし、あまたの傭兵が武器を手にするようになれば、暴虐に手を染める少数の不心得者が出てくる。同じように学術ネットワークの外側の多くの人が最強の情報発信力を手に入れば、少数ではあってもそれを濫用する特異な人が現れるのは避けがたい。炎上の真の原因はここにある。すなわち、この学術的な、あまりに学術的なネットワークが、少数ではあるが特異な人もいる世界全体への適用に堪えなかったこと、ここに炎上問題の本当の原因がある。

5) これはインターネットと Nifty-Serve をつないだ人から当時、筆者が個人的に聞いた話である。

インターネットが社会インフラになったとき、本来は、学術的な設定には別れを告げ、特異な人もいる広い世界にあわせて制度を工夫すべきだったのかもしれない。しかし、制度というものが常にそうであるように、出自のデフォルトを変更することは難しい。ましてインターネットは誰にも管理されない自律分散システムである。学術ネットワーク時代の牧歌的風景は去り、いつどこで撃たれるかわからない殺伐とした荒野が広がった。が、制度は依然として牧歌時代のままであり続けた。Facebook や LINE のような、インターネット内の閉じた島の出現は、そのような現状への不安・不満の表れと見ることができる。

受信と発信の分離

以上の認識を踏まえて対策を考えてみよう。炎上の原因が、個人の情報発信力が強すぎることにあるのなら、それをなんらかの形で制御することが解になる。どのような形が考えられるだろうか。

まず、インターネット全体の情報発信の仕組み自体は変えられないし、変えるべきでもない。一個人がマスメディアの力に頼らずに世界に情報発信力できることはインターネットの最大の利点である。これは人類史上初の快挙であり、社会が情報社会に進もうとするなら守るべき必須条件であって、これを1ミリたりとも侵すべきではないだろう。例えば現在イスラム国は世界に情報発信でき、テロリストをリクルートできる。このことは脅威であるが、仮にイスラム国が世界に情報発信できないようにインターネットの仕組みを変えたとすれば、それはインターネットの自殺行為であろう。これだけイスラム国の脅威が話題になっても、彼らのインターネット利用を規制しようという声が出てこないのは、規制が技術的に困難なことだけでなく、人々がそれがインターネットの自殺行為であることを理解しているためと考えられる。

情報発信力の抑制方法としては、インターネット全体の仕組みではなく、その中のソーシャルメディアの仕組み、すなわち SNS の仕組みを工夫するだけでよい。人々の意見形成の多くは広い意味での SNS（掲示板、ブログなどを含む）によっているからである。情報発信力を制御して、炎上を抑制した SNS をつくれば問題は相当程度解決する。SNS の外側では、これまでと変わらないインターネットの海がひろがることになり、世界への情報発信はいつ

でも誰でも自由にできる。

SNSにおける炎上抑制の方法として、一番簡単なのは、SNSにメンバーシップ制を採用して閉じてしまうことである。LINEとFacebookがその好例で、LINEは完全に閉じているので炎上とは無縁であるし、FacebookもFacebookを利用していない人は書き込めないので、比較的平穏が保たれる。いずれもSNSの外側にいる個人からの情報発信（侵入）を遮断するのがミソで、外部の個人の情報発信力を抑えることで炎上を抑制する。これはこれで1つの解である。

しかしながら、その代償として今度はそのSNS自体の情報発信力が著しく低くなるという問題がある。LINEはまったく外部に発信しないし、Facebookの情報発信力は低い。Facebookは一応外部に発信する機能もあるが、あまり使われていない。ネット世論をリードするのはブログであり、Twitterであって、Facebookではない。Facebookの日本のユーザ数が2千万人に迫り、Twitterの2倍になろうとしているにもかかわらず、ネット世論への影響力がほとんどないのは驚くべきことである。Facebookは利用者数から比べるとその情報発信力は不釣り合いに小さい。このようにメンバーシップ制をとると、外部の個人の情報発信力（侵入）をブロックできる反面、SNS自体の情報発信力が極端に失われるという欠点がある。Facebook以外にも閉じたコミュニティ型のSNSはいろいろあり、大きなメールマガジンもあるが、いずれも発信力が低すぎる。もう少しSNSとして発信力がある仕組みの方が望ましい。

SNSとしての情報発信力を保ったままで、個人の情報発信力だけ抑える方法はないか。その1つの方法として、受信と発信の分離を考えることができる。強すぎるのは情報発信の方なので発信だけを制御し、受信はそのままにしておく。すなわち、書き込むのは限られた人だけにして、読むのは誰でもできるようにしておくのである。

掲示板があるとして、それに書き込めるのは主宰者に選ばれた人だけで、それ以外の人は読むことはできても書き込むことはできないとしておく。例えば、著名経済学者だけが集まった掲示板で議論が行われており、一般の人はそれを見ているというイメージである。あるいはAKB48の中の仲好しの5人とその友人が集まる掲示板があって、ファンの人が彼（彼女）らのおしゃべりするの

を見ているという図である。その掲示板をのぞくことは誰にもできるので一般個人の受信は制限されていない。したがって SNS としての発信力は保たれる。一方、書き込めるのはメンバーだけで、外部からこの掲示板に書き込む（発信する）ことはできないので、掲示板への個人の発信力は制限される。こうして、SNS としての情報発信力を保ちながら、一般個人の情報発信力を弱めることができる。

普通の掲示板あるいは SNS はこのように発信と受信を区別しておらず、対称的に扱っている。例えば LINE のユーザになってあるグループに加わると読み込みと書き込むが同時にできるようになる。ブログなどの通常の掲示板も、普通は読むことができれば書き込むこともできる。このような対称性は参加者を平等に扱うという点では良い点があり、思わぬ出会いを生むスリリングな面白さもある。しかし、攻撃的あるいは敵対的な第三者に弱いのは否めない。

普通のマスメディアはこれを配慮して、受信と発信が非対称になっている。テレビを見るのは誰でもできるが、テレビに出るのは限られた人だけである。講演会に来て話を聞くのは誰でもできるが、講演会の壇上に立つのは誰でもできるわけではない。インターネットがこのような非対称性を持たず、誰でも平等な対称な仕組みであったのは、繰り返し述べるようにもともと学術ネットワークだったからである。むしろ平等な仕組みにも良さがあり、それは今後もインターネットのどこかに存在し続けるだろう。しかし、特異な人も含む広い世界にネットワークを拡張していくなら、非対称性を受け入れた別の仕組みも必要になってくる。その仕組みが炎上を抑制すれば、ネット上の言論空間から背を向けた多くの人を呼び戻すことになるだろう。

そのような SNS はどのように設計されるか。議論を深めるため、次節で一例を示して詳細に検討することにしよう。それはサロン型の SNS である。

7-2 サロンの構想

サロン型 SNS の仕様

受信と発信を分離した SNS の具体例として、サロン型 SNS を考えてみる。

ビジネスモデルを考えるのは筆者のような学者の得意とするところではないので、以下述べるアイデアには穴もあるだろう。これから述べることは議論のための素材、あるいは思考実験として見ていただきたい。

この SNS が従来の SNS と違うのは次の 2 つの点である。

[I] 受信と発信が分離されていること（ゆるいメンバーシップ制）

[II] 自然に切れること

炎上対策は[I]の受信と発信の分離で達成される。[II]の自然に切れるという点は SNS のもう 1 つの課題である SNS 疲れ・いじめ対策として考えたものである。本書の主題である炎上とは直接は関係しないので、以下では[I]の受信と発信の分離を中心に解説する。

まず、箇条書き 5 点にまとめて、この SNS の仕様を述べよう。この SNS はパソコンあるいはスマホにアプリをダウンロードして立ち上げて使うことを想定する。基本的な仕組みは LINE のグループあるいは Twitter に似ており、それを変形したものをイメージする。

1. [主宰者の存在] まず主宰者がいてその人がサロンを立ち上げ、同じアプリを入れた友人の中から相手を選んで参加を呼び掛ける。友人とは（LINE のように）電話番号とメールアドレスを登録してある人とする。例えば A さんの IT をテーマにしたサロン、B さんの環境問題をテーマにしたサロン、C さんの映画に関するサロンなどである。主宰者を特定するのは、サロン内で議論のもつれや仲たがひ等のトラブルが発生したとき、迅速に対処するためである。

2. [参加者は友人の友人まで] サロンに参加できるのは主宰者の友人の友人までとする。直接の友人に限定しないのは、意外な人との出会いをつくり出すためである。ネットの良さは意外な人とのつながりにある。ただし、友人の友人までに止め、それ以上にはしない⁶⁾。ここでメンバーシップ制が入る。なお、参加者をサロンから除名できるのは、その人を呼んだ人と主宰者だけとする。

3. [視聴システム] サロンは選択で公開にできる。公開になると、サロンに属していない一般ユーザがサロンをフォローしてサロンでの会話を見ることができる。見るだけで書き込みはできない。なお、見ることができるサロン数はデフォルトでは上限があり、月に低額（例えば 300 円）払うとこの上限がはずれる。ここでマネタイズを行う。

4. [サロンと一般ユーザの関係] サロン外の一般ユーザ同志の会話も可能で、一般ユーザ間でフォローして Twitter のような交流が可能とする⁷⁾。ただし、サロン参加者とは場が切り離されており、サロン参加者が一般ユーザの発言を見るか見ないかは自由である。

5. [自然に切れる] そのサロンに一定期間アクセスしないメンバーは自動的にサロンからはずされる。これは気楽な参加を促し、SNS 疲れを防ぎ、またいじめ・仲たがい等を抑制するためである。一般ユーザの視聴も同様でアクセスしないとそのサロンの視聴リストからはずれる。

この SNS のイメージは図 7.1 のようにまとめられる。

公開にすると、サロンは Twitter で書き込み側にメンバーシップを入れたような形になる。サロンがフォロワーすなわち視聴者をたくさん獲得すると、サロンに発信力が出てくる。多くのフォロワーのいる大規模なサロンのイメージとしては有名人がやっているもので、例えば池上彰の時事ニュースサロン、竹中平蔵の主宰する経済政策サロン、佐藤優の外交サロン、あるいは AKB の仲好しサロン、有名声優の声優お仲間サロンなどが考えられる。フォロワーが数万人単位とふくれあがり、多くの人が見るようになると炎上のリスクがあるが、これまでの SNS に比べるとはるかに炎上が起こりにくい。

仮にサロンの中で、誰かが軽口・失言をしたとしよう。ここで、外部の人が

6) オプションでさらにもう一段先の友人まで含むようにしてもよい。ここで書いているのはデフォルトである。

7) 観客同士もゆるい交流が可能にするのは、サロンへの生産的なフィードバックあるいはサロンへの参加予備軍が観客層から出るだろうと考えているためである。